

◇拠点形成概要

機 関 名	早稲田大学
拠点のプログラム名称	演劇・映像の国際的教育研究拠点
中核となる専攻等名	演劇博物館
事業推進担当者	(拠点リーダー) 竹本 幹夫 教授 外 23 名

[拠点形成の目的]

演劇研究と映像研究とを統合した、大規模な国際的演劇教育研究拠点を構築する。これにより映画をも含む広汎な分野において、世界の文化をリードする人材を育成することを目指す。演劇博物館では21世紀COEの成果を踏まえ、現在、学内の演劇・映像研究者を結集した教育研究拠点を構築している。演劇博物館は世界で唯一、世界演劇全体に対する視野を備えた演劇総合博物館であり、その豊富な研究資源を駆使した、ダイナミックな教育研究が可能である。演劇博物館はまた、世界の研究者と相互交流を重ね、すでに世界的な研究機関として認知されている。中国や欧米の演劇研究者にとっては、演劇博物館はアジアにおける世界の演劇研究情報の十字路であり、またもっとも巨大な発信基地でもある。ここ数年は、各国の演劇研究者・関係者が、自国演劇の紹介や演劇研究の成果発表の場として、演劇博物館を目指して集まるようになっており、ここを目指す留学生の数も倍増した。また箇所間の学術交流協定を通じて、相互に研究拠点を構築し、学生交流や研究交流を行っている海外大学も数多く存在する。複数の海外拠点と協同することにより、いまや世界的な規模で演劇研究が発展する基盤が構築されつつある。演劇研究を目指す優秀を、本拠地に国籍・学籍の別なく集めることにより、世界の演劇映像研究をリードする人材を育成することを目的として、グローバルCOE事業「演劇・映像の国際的教育研究拠点」を計画した。

これまでの具体的な実績の一例を挙げれば、日本古典演劇研究では復元研究の一環である中国およびヨーロッパ古典演劇研究との共同研究構想につき、実施段階に入った。また西洋演劇理論の研究では、日本発信のベケット研究をはじめとする画期的な研究成果が、世界の学界に影響を与えつつある。東洋演劇とくに中国演劇研究については、近現代の演劇史、および民間芸能に関する研究と、関連する資料収集活動の成果が、中国の学界からも注目されている。加えて古典演劇についての研究も開始された。映像関係資料の収集の成果により、映画史・映画理論の教育研究拠点としての基盤も整った。

今回新たに提案した演劇と映像との統合的研究も順調に行われつつある。テーマ性という点で、とくに映画は演劇と関連が深い。ただし映像技術という新しい要素により、映画の歴史・理論の研究は、演劇研究とは異質の側面を持つ。しかしながら演劇に映像を取り込む演出が行われ、また演劇自体が映像化・複製可能な事実を見れば、演劇と映画との親近性は明らかである。今や両者の理論と歴史について別個に考察するばかりでなく、現代の現象としての映画及び演劇という視点から、新たな研究方法を開拓する必要性が生じている。すなわち本拠点においては、演劇と共に映画の理論・歴史についても研究をより積極化し、名実ともに演劇・映像の総合的教育研究拠点を形成しようとするものである。

[拠点形成計画及び進捗状況の概要]

本拠点構築のために、研究分野を下記のごとくに分割し、分野横断的な研究を実施している。

- ・日本演劇研究（能・狂言・文楽・歌舞伎・近現代演劇・民俗芸能の諸分野を包括的に研究）
- ・東洋演劇研究（とくに中国演劇を中心に研究）
- ・西洋演劇研究（とくに演劇理論・演劇史・現代演劇を研究）
- ・舞踊研究（東西の舞踊理論を研究）
- ・映像研究（映画史・映画理論を研究）
- ・芸術文化環境研究（劇場マネジメント・文化政策を研究）

上記の6分野をコース化し、毎年本学大学院のみならず世界の大学院博士後期課程学生を公募し、グローバルCOE研究員に採用した。採用者は本属指導教授の承認を経て、早稲田大学大学院在生と同等の研究環境を準備し、各研究コースの研究活動に参加することを通じて、それぞれの研究キャリアを積み重ね、学位論文執筆や研究機関への就職を初めとする社会貢献を果たすことになる。平成21年度初頭の時点で、延べ数で全研究員の1割近くが専任として研究機関に奉職している。研究員には年度ごとの成果の発表を促し、紀要への査読論文の掲載、国際的な調査活動への参加、国際学会での発表の機会の提供をはじめ、あらゆる支援を行っている。また確実な学位論文執筆を促すべく、定期的に学位論文完成に向けてのゼミを開催し、各人の作業の進捗状況を把握するように努めている。なお優秀な研究員の中から2年任期の研究助手を7名選抜して任用した。また学位論文提出予定年度を迎えた研究員に限り、1年間の任期でRAとして雇用して、月額17万円ほどの給与を支払うことにより、生活面の不安を持たずに学位論文執筆に専念できる環境を整えた。今後もこの制度は継続する。支援を与えた年度から起算して2年以内に学位論文を提出することとなっている。

さらに各研究を横断するための比較演劇研究を積極的に推し進めている。例えば各国の研究者と、日本古典演劇の舞台史研究、中国古代舞台研究、西洋バロック演劇舞台復元研究を、それぞれの舞台遺構の調査を通じた国際共同研究として行った。またそれぞれの研究分野における世界的権威を3ヶ月間以内の短期で招聘し、その指導下でゼミを運営するという研究交流事業を通じて、当該分野のいっそうの進展を図った。主に西洋演劇コースでの実施が中心であるが、今後は研究員からの希望を踏まえて招聘を行うなどの工夫も取り入れて、大半のコースでの実施を促進する。

以上の通り、横断的でしかも高度に専門的な研究を通じた教育を行うことにより、拠点形成計画は順調に進捗している。

#### ◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

##### (総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

##### (コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、大学の将来構想の中に本プログラムが明確に位置付けられており、評価できるが、大学としてより一層の財政的支援を考慮する必要がある。

拠点形成全体については、大学博物館を基盤としたユニークな教育・研究拠点として、国際的な演劇研究の中で、日本を代表する拠点形成となっており、評価できる。

人材育成面については、他大学からも広く若手研究者を受け入れており、国際的な拠点形成に相応しいと評価できる。

研究活動面については、演劇研究と映像研究を統合する視点と方法の構築が期待される。

補助金の適切かつ効果的使用については、招聘講師旅費の単価及び招聘研究者の人数が大幅に増加しており、更なる考慮が必要である。

今後の展望については、演劇と映像の国際的教育・研究拠点として積極的な海外発信を進めていく必要がある、また、養成した若手研究者たちが働ける分野・方面を積極的に開拓していくことも必要である。